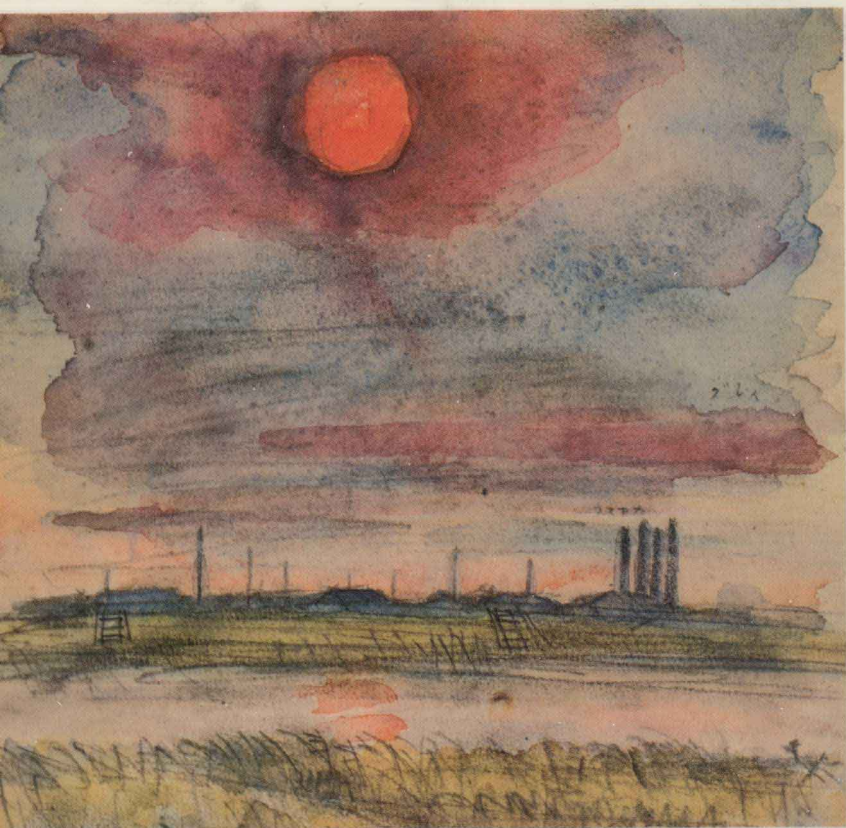


早乙女勝元

小説選集

11

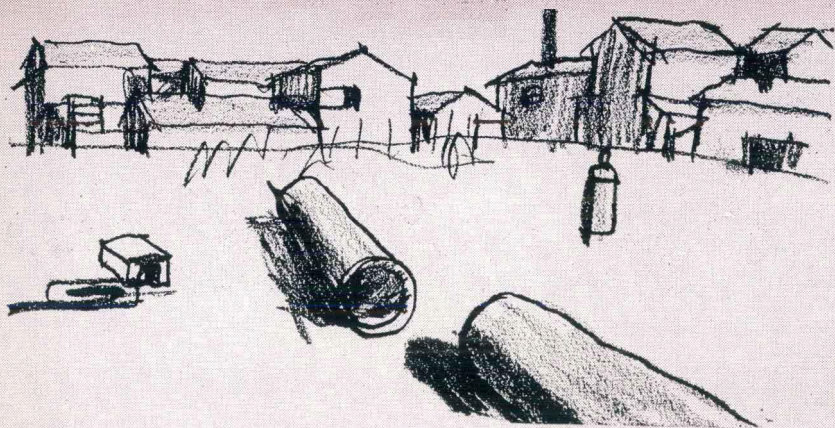
太陽が ほしい！



早乙女勝元小説選集

11

太陽がほしい！



早乙女勝元小説選集・11

太陽がほしい!

1968・初版

作者 早乙女勝元◎

画家 久米宏一



制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一五・一六

電話 ○三(203)五七九一

振替 東京九一九五七三六

Ｂ６ 422P 0393-90911-8824

一九八六年二月第六刷

落丁・乱丁本はお取り替えます

はじめに

作者



こんどは、どんな小説かって？

思いきって、新しいミステリーを考えてみたいのです。

と、いいまでも、スーパーマンもどきの探偵が登場するわけではありません。ごく平凡な、工場づとめの多感な一青年が主人公です。そして生活感をたっぷりともりこみながら、一九六六年五月のある日、東京の下町におきたふしぎな事件を、この若者の二つの目をおして追いかけてみたいと思います。

小さな事件は、ほそい迷路のように右に左にくねって、もつれたりからんだりしながら、やがてしだいに社会的なひろがりを見せ、ベトナム戦争とのきびしい関係にある基地日本の現実にまで肉薄していくはずで、なぞをとくカギは、実はそのあたりにかくされているのです。

しかし、こんな大それた構想が、はたしていきいきと、しなやかに展開できるでしょうか。

ぼくはいま、その不安と緊張とに、ドキドキ……と胸を鳴らしています。

とにかく、思いきって、力いっぱい書きぬきます。ぼくの全力投球です。

登場人物

紹介

——ほかに

伏せられた人物

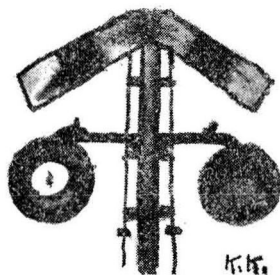
その他大勢

▼石黒達一 24歳、東和楽器の仕上工。

「仕事は、なんにもおもしろいことはないな。ただ一つ、おれの生きがいにつながるものはいえ、三年前ふいに工場を去っていった久美が、いま、どこにどうしているかということだ。おれは、久美を忘れることはできない。きょう工場にかかってきた電話は、もしや、その久美からなのではないだろうか？」

▼花村久美 24歳、かつて東和楽器の仕上部にいた娘。

「達一さん、おねがいというのは、実は……これをあずかっていただきたいの。でも、封筒のなかは見えてほしくないわ。それで……なんにもきかないって、約束して。あたし、きかれても、いまのところなんにもいえないのよ。ね、おねがいだからそうして。あたし、それを持っていると、なにもかも危険に……」



▼高津四郎 24歳、かつて東和楽器の機械工。

「それがな、彼女一人じゃなかった。背の高い男といっしょだった。二人ともろくに話もせずに窓ぎわにつたっていったんだ。男？ そうだな、若いといっても二十七、八といったところか。おれはもっと監視していたかったんだが、久美に見つかっては始末悪いし、ちょうど、電車が駅へついたものだから」

▼佐藤周平 23歳、旋盤工、サークルともしび会の責任者。

「いま、単車をふっとばして、そのへんをずっとひとまわりしてみたんだけどよ。ただの黒っぽいやつたって、それだけじゃどれが犯人やら見当もつかん。でもよ、ほんとうにそんな黒い影が窓にはりついていたのか？ この家には、賊にねらわれるような金目のものは、なんにもありやしねえじゃねえか」

▼尾形虎一 22歳、通称バタヤン。ともしび会のメンバー。

「畜生め、まったく、なんてことをしやがるんだろう。二十万人もの日本人の血のしみた沖繩の道をよ、こんだ、やつらの兵隊や兵器どもがわがもの顔に走っていくんだ。人間の腹をさき生き肝までえぐりだすってのは、二十一年前の日本の話じゃねえぞ。現にいま、それがやられてんだ。ベトナムですよ！」



▼早苗 22歳、ソネット印刷の見習いタイピスト。

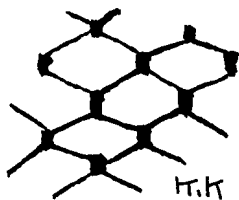
「だって、あたしは、久美ちゃんが夜おそく、あなたといっしょにこの家にはいるのを見たのよ。あなたは黒っぽいアノラックを着てたじゃない、長ぐつをはいて。で、この家はあなた一人つきり。それでも、あなたはまだ久美ちゃんと関係ないというつもり？ 無関係でないという証拠は、ちゃんとあるのよ」

▼杉田重治 36歳、大学講師をかねる平和活動家。

「そうです。ところが、十日ほど前のことでした。この横川基地の北西、行政道路を走るバスの車掌が、バスの窓から奇妙なものを発見したのですがね。早朝でした。道路よりの草むらから、人間の片手が白くつきだしていたのですよ。五指はひらいて空をつかみ……」

▼隆の声 住所、氏名、年齢いずれも不明。

「あなた石黒さんですね。……あなたは、あまり妙な関心をおもちにならぬほうがよろしい。あなたにとって危険なものは、すぐ手ばなすべきです。それが身のためだといいたいのですよ。危険なもの？ ふふふ……しらばっくれちゃいけません。ネガです。フィルムナンバー七番のネガフィルムのことです」



太陽がほしい！*もくじ



はじめに 1

登場人物紹介 2

第一章 黒い渦 7

第二章 危険信号 79

第三章 疑惑 141

第四章 最悪の事態 211

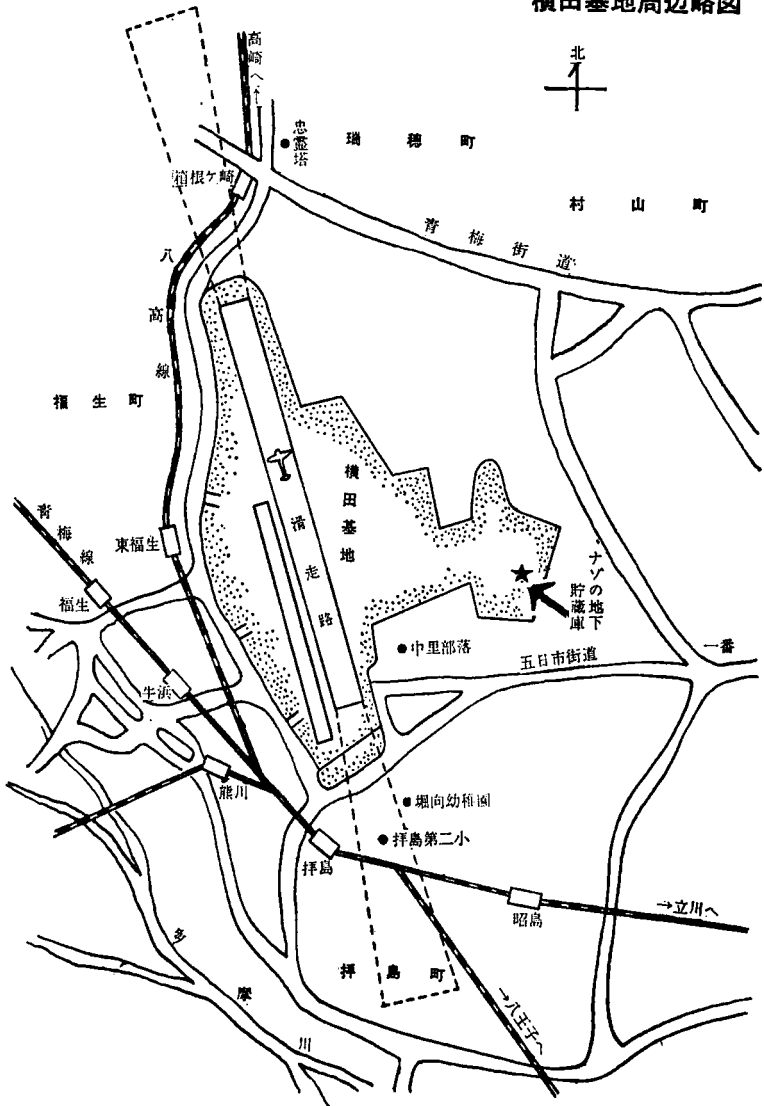
第五章 対決 278

第六章 あ、富士が…… 347

てのひら自叙伝〈11〉 421

カバー絵・カット 久米宏一

横田基地周辺略図



第一章 黒い渦



1

一九六六年五月のはじめ、石黒達一の乗っていた私鉄電車が、都心にむかう高架陸橋の上でなんの前ぶれもなく停電した。この偶然から生まれた小さな事件が、一人の若者の平凡な日常を、百八十度逆転させることになったのである。

時間は夜十時に近かったから、一瞬のうちに車内は完全な闇にとざされた。見えるものといえば、窓外にひろがる下町の密集した人家の照明だけである。電車はすいていた。闇の空間をさえぎるものがないのをいいことに、右の窓からも、左の窓からも人家の灯りがおびただしく無数に浮きあがって、それは、はるかな地平線まで星座のようにつづいた。あたかも自分たちだけが、闇空の一片所の展望台から地上を見おろしているといった感じであった。

「停電か、ちょー！」

と舌うちしたのは、達一のとなりにすわっていた高津四郎である。

「しかし、見ろや。どこもかしこも、灯りのあるところ、人間どもがひしめいているじゃねえか。ちっぽけな空間を四角にきって、満足げな顔しよう」

「うむ」

達一は、かすかにうなずいたままだ。

かれは、さっきから別のことを考えている。……きょう昼に工場へかかってきた電話は、あれはだれなのだろう。事務員によばれて、あわてて事務室へとんでいったら、受話器は机の上においてあった。石黒ですがというと、——もしもし、あ、石黒さん？ といったきりで電話はぶつんときれてしまったが、もしや久美ではないだろうか。ほかに女性からの電話などあるわけがない。しかし、久美だと考えることも、きわめてとうとつであった。まさかと思う。

「よう、どうだ。すぐその六畳ときたら、テレビにステレオに、トースター、ジュースー、冷蔵庫に洗たく機と、電気製品がなんでもそろってやがる。電気ずくめの谷間で、お二人さんがちんまりこんとすわっちゃってよう。あれは新婚だな？」

四郎は停電をいいことに、窓外を見物するのに余念が

ない。五月といつても、妙になまぬるい夜だったから、どの家もたいてい窓をひらいていた。高架線の下に密集した木造アパートなどは、あたかも手にとるように、その生活が見おろせるのである。

「おれはよ、ああいうホンワカムードってのかな、こうへんに甘っころいの見ると吐き気がしてくるんだ。ヤドカリみたいに、ちっぽけなカラんなかにのほほんとしてこもっている。そんな感じがしねえか？」

手もちぶさたなのか、四郎は闇の中からしきりと声をかけてくる。こうなると、達一も沈黙を押し通すわけにはいかない。

「世間の風がつめたけりや、カラだって厚くなるだろうさ。しかたないさ」

「しかし、そういったって、いまの世の中ときたら、絶対に泰平ムードなんかじゃねえぞ。それを自分たちだけ、安全地帯のつもりでいるんだから笑わせやがる」

「うむ」

達一はひくくうなずき、

「その通りだ。平和ムードじゃないからこそ、見ろ、どこの家だって、ほとんどせつせつと内職をしているじゃね

えか。しかも、こんな夜おそくまでだ」

「ああ、そういうえげそうだな。そしておれたちだって、こうやって真夜中のアルバイトにいくというわけか」

「そうだ、おたがいさまにだ」

「しかし、おれはどうも、あの六畳が気になるな、あのヤドカリがな。見る、でれこんとはれぼったい顔だ。食いたいだけ食って、寝たいだけ寝ている、あぶないものには手を出さず、平穩無事、すべてはなるようになる……」

「そう、じろじろ見るなって」

「ばか。ほかに見えるものがないんだからしかたねえじやねえか。文句あるなら、電車にいえってなもんだ。けどよ、まさか、この真ッ暗闇の空中に人間の目が光ってるとは、町中だれ一人気がつかねえだろな」

達一はとりあわず、四郎はまだ酔っているんだなと思つた。

酔っていて当然、おそらく酔いからさめたくはないのだらう。しらふでは、どうにも息苦しくて、たえがたい作業にむかうのだから。

二人は、それぞれの工場に働いていたが、一日の仕事

をおえて、一杯ひっかけた勢いで徹夜のアルバイトにくく。それは近郊の水田、沼地に野生する食用ガエル取りだ。これを「ゲエロ取り」という。ゲエロ取りには、それなりの道具がいる。「パッチ」と称して、カエルをはさむ特殊な金具をつけた五メートルほどの竹のつなぎざお。乾電池八個をいれた光源の強烈なライト。捕獲した食用ガエルがとびださぬように口に布製の袋のついたショイかご。長くつにゴムびきのアノラックと、実にもものしいいでたちだ。昼間働いただけでは食えないから、火のつくような焼ちゅうをあおってでも、たまにはパッチを水平にかまえて、川辺や沼地をよろよろとさまよわねばならない。

ライトの照明は、ざっと十メートル先の闇をてらしだし、暗緑色に黒いはん点をつけた食用ガエルは、その光線に目がくらんで動かない。明りをそらせば逃げる。その瞬間だ。一つきに獲物をおさえこむのは。

「ぐわッ！」

と、ぶきみな鳴き声を発して獲物は鉄の歯でがっちりとおさえこまれ、後肢にものすごいパネをきかせて、もがきあばれる。必死にはねるやつを金具からはずして、

そのぬらぬらしたひふをつかんだときの感触といったら、身体中とりはだのたつようなぶきみさである。いくらやっても、この気味悪さばかりは、一向になれるけはいがない。

それでも、食用ガエルのことしの相場は、キロあたり百九十円、ジャンボー（大）ならば、五、六びきで一キロだ。眠気をふりはらいながら、ぬかるみをよるよるとさまよい、たとえ一度ぐらいこえたごとに落ちることがあっても、一晩で十キロも取ればけっこうなアルバイトになる。日冷、大洋漁業など大手のメーカーが、これをカンヅメにしてアメリカ、東南アジアへ輸出するのだ。いわゆる「ゲテモノカンヅメ」というやつだ。が年々食用ガエルはへり、その獲物も仲介人を買いたたかれる一方なのだが、取ればすぐ金になる。金になるというこのことが、食用ガエルの出はじめる五月ともなると、例年のように下町の中小企業に働く若者たちの心をひきつけるのだ。しかし深夜の徹夜作業となれば、それは決してたやすいものではない。

電車が停電したのをいいことに、達一はそっと目をとじる。どうせ、この高架線をふたたびひきかえしてくる

のは明朝の一番でだ。あわてることはない。できればほんの少時間でも、ここで眠っておくにかぎるというものだ。

しかし、ほんとうにあの電話は久美だったのだろうか、またしてもそれが気にかかる。ぶつんときてしまつて、それっきりかかってこないのが、なんとも後味が悪いのだ。といって、まさか久美であろうはずがない。花村久美は、三年前にふいと達一の前から姿を消してから、まったくの音信不通、いまごろどこにどうしているのかさえもわからない。久美であるわけがないではないか。……

「一体、この電車、どうしたんだ？」

暗闇の中で、さすがに業をにやしたのか、おなじ車両の乗客がさわぎだした。

「畜生、朝まで、ここにくぎづけにさせるつもりか」

「車掌は、なにをしてやがんだ」

「さっき、しばらくおまちくださいといってきたが、それっきりだ」

「ばかにしやがって」

「終電に乗りおくれたら、どうするんだ」

「この分じゃ、いつ動きだすかわからんぞ」

「そうだ、いま何時になる？」

何時という問いに、達一は腕時計をかざしてみたが、暗闇では文字盤も見えなかった。四郎が気をきかして、携帯ラジオのスイッチをいれる。

「……きのう八日正午ごろ、米軍機がついにハノイに侵入、軍事目標を攻撃しました。ついでサイゴンからの報道によりますと、サイゴンの米当局は八日、つぎのように発表」

ラジオのアナウンスが、鮮明に聞にながれて、乗客はいっせいに口をつぐんだ。アナウンスは、よどみなくさらにつづく。

「米海空軍機は、八日までの北ベトナム爆撃で、ハノイとその周辺をむすぶ主要鉄道、幹線道路および橋などをすべて爆破したとつたえ、同発表はついで、米機はハノイ北東三十五キロのバグジアン橋を完全に破壊し、ハノイから東南に通じる鉄道はフリー橋で切断、またハノイとハイフォンを結ぶ連絡路はハイフォン鉄道と陸橋で切断したとのべ、これによってハノイは事実上孤立したといっております。米國務省当局はたびたび北爆には聖

域はないということを言明してきましたが、ハノイ、ハイフォン近郊の連続爆撃にひきつづき、八日ついに米軍機がハノイ上空に侵入、こうして、ベトナム情勢はいよいよ重大な局面をむかえることになりました」

「やった」

達一はひくくうめく。

いまのは午後十時のニュース解説らしかったが、平和ムードなど一カケラもない緊迫した空気を、ラジオは刻刻とつたえている。四郎のいう通りだ。安全地帯など、いまやどこにもありはしない。アナウンスのむこうにメコン・デルタの空にひびく爆音や砲声、悲鳴と炸裂音が直接耳に迫ってくるような気がする。

達一は、ぶるっと身ぶるいした。

闇がたえられなかった。この闇が。ああ、早く電車がここから動いてくれないものか。早く、この暗黒の世界から明るいところへ走りだしてくれないか、早く……、達一は、思わずイスから立ちあがり、窓ぎわへ足をはこんだ。

ガラスごしに、町まちの灯がはねかえってきらめく。闇夜の波間にまたたくいきり火のようだ。

窓ガラスにひたいをおしつけて、目を高架陸橋の下へむけると、いまのニュース解説とはうらはらに、一見して平和そのものの生活が一つ一つ螢光灯の照明の下にこぢんまりとひらけ、その残光がせまい横丁の道にまであふれて、夜なきそばの屋台がチンチン……と鈴を鳴らして、町かどに消えていった。そのとき、おやと達一は目を見はったものだ。

夜なきそばの消えた反対がわの道から、白っぽいセーターの女があらわれて、急ぎ足にこちらに歩いてくる。

よく見れば、女はこきざみに走っているのだった。高架線の下へむかってきたから、その異様なそぶりが、正面から達一の目をとらえるところとなった。女はまだ若かった。身のこなしでわかる。ひくい軒下にびたりと身をよせるようにして走りながら、一、二度うしろをふりかえり、スカートをひるがえして走って、いきなり道のきわの電話ボックスへとびこんだ。

「あ！」

達一は短声を発した。電話ボックスの室内灯に、女の横顔がくっきりとうつしだされて、それはたしかに花村久美と思えたからだ。

しかし、奇怪なことに電話ボックスにとびこんだはずの女の姿は、つぎの瞬間達一の視界からたちまちにして消えていた。どこへいったのか。一人だけのせまい空間にとびこむなり女はドアの陰にひくく腰をおとして、しやがみこんだときか思えなかった。公衆電話は一見して無人のものと変ったが、しかし女が電話ボックスに入ったことは確実だった。そのことにまちがいはない。達一は息を吞む。なんのために女は、あんな奇態なことをするのか。

そのとき一人の男があらわれて、すうっと影のように、電話ボックスの前を通りすぎていったようである。

とたんに黒い幕がきつておとされ、あたりは一時に明るみをとりのどした。車内電燈がともったのだ。エンジンがぶい震動をともなうて、足もとにうなりだし、電車はがくんとゆれて動きます。達一は、いきなり四郎の顔にぶつけるようにしていった。

「おい、きょうのゲエロ取りは中止だ。おれ、ちょっと、つぎの駅でおるからな！」

「なに？」

四郎は大きく目をむいた。

電車が高架線上の丁駅に停車して、ドアがひらくなり、達一はからだごとぶつけるようにしてホームへとびだした。

「おい、ほんとにかよ、冗談じゃねえぞ」

四郎が、あわてふためくのをふりきって、

「すまん、急用を思いだしたんだ。今夜は一つ、おれの分まできばってくれ！」

ショイかご、バッチ、ライトなどの道具は、みんな四郎におしつけた。四郎は迷惑だろうが、いまや食用ガエルを追うどころではない。アルバイトはいつでもできるし、そんなものは、この際どうでもいいことだ。

久美だ、この三年間ついに忘れることのできなかった花村久美が、偶然にも達一の目のなかに登場したのだ。電車の停電が、この奇跡をもたらしてくれたのである。久美のひそんでいるはずの電話ボックスは、この駅からそう遠くはない。全速力で走っていけば、彼女に会えるかもしれない。

達一はホームから改札口にむかう駅の階段を、ころげるようにとびおりた。駅員の姿がないのいいことに、一気に改札口をつきぬけた。

駅前の商店街は、すでに灯を消していた。夜も十時をすぎると、軒なみシャッターがおりている。一軒だけ、赤デョーチンをぶらさげた小さな飲屋にじゅうじゅうと油っこいモツやきの煙が充満して、なわのれんの隙間からはいでる煙とともに、土方ふうの男がぬっと外へ出てきた。両足をもつれさせながら、夜の空気をかきわけてやってくる。酔客はよける間もなく、やみくもに走ってきた達一にはねとばされて、どっと路上に尻もちをついた。

「こ、この野郎！ ふざけやがって。待ちやがれ」

「それどこじゃねえんだよ」

達一はふりむきもせず、さらに息せききって走った。酔客をあとに、高架線の陸橋にそって、やみくもに走った。走る達一の頭のなかに、きれぎれに久美への思いがつらなる。

久美は、たしかに電話ボックスへとびこんだ。そして、ドアのかげにしゃがみこんだ。この目で見たのだからま

ちがいない。電話ボックスの室内灯にてらされた顔は、別人のように青白くこわばっていたが、ほおからあごにかけてきゅっとひきしまった線は、あれはたしかに久美のものだ。忘れることはできない。久美はしかし、なんのために電話ボックスなどに身をひそめる必要があったのだろう。もし、身をひそめるといふ表現があたっているなら、彼女は、だれかに追われていたということになる。

だれに？

——ある男にだ。

達一はここで、久美はこの三年間、はたして一人でいたのかどうかを考えてみた。年ごろの娘が、まさか恋一つせずに三年もカスミを食っていきっていたとは思えない。ぞくっばいことばでいえば、なんらかの男関係があったとみるほうが現実的なのだ。すると久美を窮地に追いこんでいるものは、愛情のもつれ？ たぶん、そんなものだろうと思う。

彼女はおそらく、ある男に執ようなまでに迫られて逃れ、この自分のところにまで救いの手を求めてきたのだ。すると、きょう工場にかかってきた電話も、やはり久美

のものだったにちがいない。

達一は走りながら、しだいに、足なみの重くなるのを感じないわけにはいかなかった。

そんなところに深入りしてもはじまらぬというためらいと、いや、三年前の久美がはたしてどのように変貌したかを、この目でたしかめたいという衝動とがあった。もしかして彼女のイメージが、あの三年前のものより少しでもくずれ、にぎっているなら、彼女を思いきるのに絶好の機会だと思う。

久美のおもかげは、じっさい執念ぶかく達一の頭の中に焼きついてしまっていた。いや、それはこの三年間のうちに、しだいに美化され、現実の久美から遠のき、かれの青春の理想像となっていくらしいさがある。したがってその夢は、久美に会いさえすればあっけなくさめて、失望に変わるかもしれない。それでいいのだ。それが、たしかな現実なのだ。どうせいつかは忘れなければならぬ女なら、早いほうがいい。この機会を逃がしてはならないと思う。

達一はほんと熱い息をはき公園を横ぎって、小さな病院のかどを右折した。